

共生・共栄・協働がつくる新時代の日本・中東関係

日本国総理大臣・安倍晋三

2013年5月1日 於・キング・アブドゥルアジーズ大学

I はじめに

アッサラーム・アライクム。

お集まりの皆さま、サウジアラビアにまた、やってくることができました。6年ぶりに訪問できましたことを、心から嬉しく思っています。

さかのぼりますと、お国の政府要人が、わが国を初めて訪れたのは、サウジアラビア建国からわずかに6年目、1938年のことでした。それから数えまして、本年は、ちょうど3四半世紀に当たります。

今回の旅をひとつの節目とし、私は、日本とサウジアラビア、日本と中東との、まったく新しい関係、いままでと異なる次元の結びつきを、作りたいと思っています。

II 産業連携に圧倒的広がりを――農業・医療まで

今回の訪問には、わが国産業界のリーダーたちが、大勢同行してくれました。

お国のサウジ・アラムコと、住友化学が折半出資したペトロ・ラービクは、押しも押されも、しない、世界有数のエチレン・センターになりました。

トヨタ自動車は、「日本・サウジアラビア自動車技術高等研修所」を、大いに盛り立ててくれました。研修所は、ゆうに1000人を超す、自動車技術者を送り出しています。

昨年12月には、いすゞ自動車のトラック組立工場が、サウジアラビアにオープンしました。

こうした会社や、そこで働く日本人のみなさんは、わが国モノ作りの真髄を、サウジアラビアの若い世代へ伝授しようと、真剣な方ばかりです。

みずみずしい日本の作物を、中東の食卓に届けるため、懸命な人がいれば、わが国に一日の長がある、画像診断や救急医療の分野で、当地の医療を充実させようと、やる気に燃える人たちもいます。

もともと頑丈な日本製の太陽光パネルは、砂塵に耐える力を、みなさんとの協働によって、獲得していくでしょう。中東で、日本の力を加えて生まれる電力は、みなさんを、アジアと、欧州をつなぐ、一大グリッドの中心へ押し出すのです。

中東の水道インフラに対しては、「漏水率」の低さを誇るわが国こそが、貢献できるはずです。

東京の、漏水率をご存知ですか。実に、3%という低さです。ではこの数字は、半世紀前、どれくらいだったと思われますか。30%もありました。日本にできたことが、皆さんにできないはずはありません。その、お手伝いをしたいのです。

みなさん、これからの中東と日本は、石油・ガスを超えた、経済・産業全般に及ぶ結びつきを強めていきます。それが両者の関係を、格段の高みへ持ち上げるでしょう。以前なら想像の及ばなかった広がりへと、われわれを導くでしょう。

III キーワードの1・共生と共栄＝タアーイシュ(al-ta'aish)

若い中東、伸び盛りの中東、産業の高度化に向け、向上心のかたまりのような中東と、日本の産業力が結合するとき、そのシナジーたるや、いかばかりでしょうか。

中東と日本の双方にとって、大いなる成長の機会が現れるのです。

私はいま、日本経済を力強く復興させるため、三本の矢をいっぺんに放つ政策を実行しています。

金融、財政、成長政策という三本の矢です。

これを強く、速く、間断なく射込むことで、日本を、再び活力に満ちた国にしようとしています。

経済的に強い日本とは、みなさんが抱える課題を、一緒に考え、解決していく日本です。

その、もてる経験、知見、技術をみなさんと共有し、中東の地で雇用を生み、付加価値の段階を、一緒に上って行く日本です。

一方が売り手、他方が買い手という、一方通行の関係は、もはや過去のものになりました。

資源の分野においてさえ、日本は、再生可能エネルギーや、世界一安全な、原子力発電の技術をご提供できます。

中東と日本は、利害と、関心を共にするパートナーです。中東と日本の21世紀とは、共に生き、共に栄える、共生と、共栄の世紀なのです。

IV キーワードの2・協働=タアーンヌ(al-ta'aun)

経済・産業で、従来の枠を超越していく日本と中東は、もうひとつの超越を果たします。

政治、安全保障の関係を、これからの日本と中東は、日に日に強く

していくのです。これが、英語で言うなら2つ目の「beyond」です。

日本は昨年11月、パレスチナにオブザーバー国家の資格を与え、国連決議に対し、賛成の票を投じました。

我が国は従来から、独立国家樹立に向けたパレスチナ人の悲願を理解し、その民族自決権を支持しています。

イスラエルと、将来の独立したパレスチナ国家が、平和で、安全に共存する、いわゆる「二国家解決」をサポートしてきました。その立場から、賛成票を投じたのです。

みなさん、ここからが、本当の難関です。

パレスチナとイスラエルの両当事者には、一刻も早く直接交渉を始め、和平へ向けた努力を倍加する責任があります。

中東各国にも、二国家解決に向け、知恵と、力を振り絞る責務が生じました。

また、シリアで進む惨劇や、イランの核問題にも、目をつぶることはできません。

中東から北アフリカにかけての
一円に、いまや、歴史的転機が訪れ
ています。

だからこそ、当面する不安定の要
素を取り除かなければなりません。

安定と繁栄を享受する、希望の
地、揺るぎない、成長の舞台を、当
地にもたらさなくてはならないからで
す。

その努力を、日本は一緒に担い
ます。

日本とサウジアラビアで、日本と
アラブ首長国連邦(UAE)で、ある
いは日本とトルコで、力を合わせ、
地域一円の安定へ向け、袖をまくっ
て、一緒に働こうではありませんか。

わが国はみなさんと、協働、タ
ーウヌを進めるのです。

V 22 億ドルを中東・北アフリカへ

そのひとつとして、今度私は、訪
問先のサウジアラビア、UAE、トル
コのそれぞれで、安全保障に関わ
る対話を進めるよう提案します。

私自身、できれば何度でも当地
を訪れたいと思っていますが、わが
国は中東各国との間で、首脳同士、

あるいは、安全保障を担うハイレベ
ルの当局者同士の間で、不断の協
働を図ります。

そればかりではありません。このた
びわが政府は、中東から北アフリカ
にまたがる広い地域で、それぞれ
の国との協働を進め、安定と、平和
を当地に根付かせる一助とするた
めに、今後、22 億ドル規模の支援
を行うことにしました。

私達のタアーウヌ、協働に、内実
を与えるためにほかなりません。

一緒に叡智を集めましょう。想像
力をはばたかせましょう。みなさんの
夢を、日本の、私たちの夢にさせて
ください。

日本にはそのため進めた、パイロ
ット事業があります。

ヨルダン、イスラエル、パレスチナ。
この、どれひとつが欠けても成就し
ない、「平和と繁栄の回廊」プロジ
ェクトです。

ヨルダン溪谷を、緑したたる沃野
(よくや)とし、西岸地区の若者に、
勤労の汗が、喜びの汗であることを
知ってもらうための事業です。

私は、中東の、躍進しつつある企業にも、この事業へぜひ参加してほしいと思っています。

VI キーワードの 3・和と寛容 = タサムフ(al-tasāmuh)

そして、勤労の汗こそは、なにより尊いものであり、その汗を共に流し、達成の喜びを共にするところにこそ、和と、寛容の精神が生まれるということ、日本人はよく知っています。

古来日本人は、水を分かち、乏しきを補い、力を出し合って、その年、その年の、みのりを喜ぶ伝統をはぐくんできました。

ここに生まれたのが、和を重んじ、寛容をむねとする生き方です。

現代の喧騒や、働き方の変化は、これを、衰えさせたと思っていました。

そうではなかったと教えてくれたのは、東日本を襲った悲劇です。

言語を絶する被害にあいながら、それでも助け合い、いたわりあって、乏しい救援物資を譲り合おうとする被災地の人々の態度こそは、寛容

の心の崇高さにおいて、私たちを深く打ったのです。

別の例を挙げましょう。

日本のモノ作りの現場には、欧米企業の工場では当たり前の、分業がありません。

例えば不良品の検出を、ラインの作業者が実施します。

一方は、欠陥品を見つけたい。他方は、見つけられたくない。本来利益が相反する職種なのに、これが日本の工場現場で初めて、一人の作業者のうちに融合したのです。

良いモノを作るという高次の目的に奉仕するため、互いに協力しあうことを喜びとする文化は、近代的工場の現場において生き続けました。和と、寛容の精神は、現代日本人に受け継がれて今に至るのです。

だからこそ、私は、サウジアラビアや UAE の皆さんが、費用の負担などなんでもない、技術指導者を送ってくれと、日本に言うておられるのを聞いたとき、深い喜びを覚えました。

これから日本は、サウジアラビア、UAE を手始めに、「コストシェア技術協力」という新機軸を始めます。

経験豊かな JICA の専門家を、みなさんがたにコストを負担してもらったうえ、受け入れていただく方式です。

彼ら日本の技術者は、モノづくりの「匠」としてのノウハウとともに、協力の精神、和と、寛容の心を、みなさんに伝える伝道師になるに違いありません。

逆に、みなさんと深くつきあう日本の技術者たちは、イスラームがその根っこのところで、他者を愛し、受け入れる、深い寛容の泉を満々とたたえた教えだということを、肌身で学ぶことでしょう。みなさんがいつも大事にしてきた、共生、共栄、協働、そして寛容の精神に、日本の技術者は、多くを教わるだろうと思います。そして、今度はそれを、日本へ伝える伝道師になってくれるに違いありません。

VII 和と寛容の担い手をつくる・広範な人的交流を

ですからこそ、――これをお話して締めくりにしますが――、私は、日本と、サウジアラビア、UAE、そしてトルコなど中東諸国との間で、人

と人、学生と学生の交流を増やしていきたいと思っています。

私は、日本の公務員は、無私で、潔癖で、よく働く人たちだと思っていますが、そこを学びたいと、公務員を日本に送ろうとする動きも起きています。

国や、体制がどうあれ、中東の皆さんはどこでも、清廉で、秩序ある社会を望んでおいでです。日本がその一助になれるなら、これくらい、日本人の私たちに誇りとなる話はありません。

向こう5年、わが政府は、中東諸国と共に、約2万人の研修実施と、専門家派遣を行います。

留学生も増やします。サウジアラビアから日本へ来る留学生は、この7年で、30人から、500人に増えました。UAEから日本へ来る留学生は、いま、60人程度です。この数も、500人に増やします。女子学生も、きっと数十人にのぼるでしょう。

みなさん私は、「2つの beyond」からお話を始めました。

資源を超えて、経済全般の関係を結び、共生と、共栄を図る、というのが1つ。

経済だけの関係を超えて、地域の平和、安定、成長をともに図る、協働の関係へとというのがもう1つ。

2つの大きな跳躍です。

そこに生まれるのは、多面的な関係のシナジーです。“エナジー”が結びつけた関係は、ここに至って、本格的な“シナジー”を獲得するのです。

それが、日本と中東に、さらなる協働、共生と、共栄を促します。中東を、希望の地にし、力強い成長の舞台とするため、わが国は、今後22億ドル規模の支援、約2万人の研修実施と専門家派遣を含め、みなさんとの共生、共栄、協働に、力を注いでいくのです。

VIII 終わりにあたって

アブダビでは、地元の強い要望をいれ、日本人学校の門戸を開放することにしました。

日本と中東の未来を担う幼子たちが、学業と、日本の学校の名物、運動会や、学芸会といった楽しい行事を共にしながら、一緒に笑っている姿を想像しましょう。

そこに、わたしたちの未来があるのだと、私は信じます。

スピーチを締めくくるに当たって、私は、国王陛下が、ご自身の発議によって始められた、アブドゥラー国王国際宗教・文化間対話センターに対し、その人類史的、世界史的意義の偉大さにかんがみまして、心から、敬意を表したいと思います。

異なる宗教のあいだに対話を促し、寛容の精神が定着するよう、センターは、たゆみない活動を続けてきました。共生と共栄、協働、寛容の精神を、これほどよく体現した結晶はありません。

これを私自身の範とし、私は、日本と中東の相互理解を図り、一層深い協力の戦略を模索するため、互いを結ぶ知的対話に力を入れていくつもりです。

当地中東へ、そう遠くない将来、再度訪れたいと申し上げ、スピーチを終わります。ご清聴、ありがとうございました。

シュクラン・ジャズイーラン。